第19回男子アジア選手権

2020年1月16日～27日　クウェート

試合結果報告

1　月　27　日　（　月　）

JPN	VS	BRN（バーレーン）
14	前半	15
13	後半	11
27	合計	26

個人得点

No.	ﾎﾟｼﾞｼｮﾝ	名前	前半	後半			合計
3	RW	柴山　裕貴博					3
10	LW	杉岡　尚樹					1
12	GK	岩下　祐太					0
13	PV	笠原　謙哉					0
14	CB	北詰　明未					0
15	LB	部井久アダム勇樹					1
18	LB	成田　幸平					0
19	RB	徳田　新之介					7
20	RB	渡部　仁					1
21	LW	土井レミイ杏利					2
25	RW	元木　博紀					4
26	GK	久保　侑生					0
27	PV	玉川　裕康					2
31	LB	吉野　樹					4
33	CB	東江　雄斗					0
43	PV	吉田　守一					2
		合計	0	0	0	0	27

戦評

今大会7戦目（最終戦）3位決定戦の相手は、アジア代表として今夏の東京オリンピックに出場（初）を決めているバーレーン。メインラウンドで25－23で勝利したが、ダグル監督就任以降、公式戦では1勝3敗の戦績。一昨日の準決勝での惜敗から、いかにメンタル面・フィジカル面の立て直しを図るかがポイントであり、これまでの全ての活動の真価が問われる1戦。日本はGKに岩下、トップに東江、笠原をセンター、2枚目に渡部と吉田、1枚目に柴山と杉岡を配置した「5－1DF」でゲームスタート。攻撃ではプレーメーカーに東江、渡部と吉野がバックコート、柴山と杉岡がサイド、ポストに吉田の布陣。

開始早々いきなり7mTで先制を許した日本だが、直後に柴山が個人技から得点。バーレーンはキープレーヤーであるキャプテン99番ALSAYYADを中心に攻撃を組み立てる。日本は東江のリードから吉野のカットイン、柴山のサイドで反撃。バーレーンも今大会好調なバックコートプレーヤー7番MERZAのミドルなどで加点し、前半6分過ぎから4連続得点で引き離しにかかる。日本は吉田が獲得した7mTを相手GK21番のALIにセーブされるなど苦しい時間帯が続く。

日本はここでゲームの流れを変えるべく北詰を投入する。さらに杉岡の芸術的なループで5－9となった後タイムアウトを請求し、DFについて修正と確認を行う。すると、渡部のミドルや、岩下の好セーブ、クイックスタートから吉田のポスト、玉川のポストなどで、徐々に点差を詰めていく。8－10となったところで、バーレーンがタイムアウトを請求。しかし、日本は元木のサイド、速攻でさらに点差を縮め、28分には徳田のパスカットから元木がうまく繋ぎ、最後は徳田が決めて14－14の同点に追いつく。しかし、すぐさまバーレーン7番MERZAに決められ、14－15の1点ビハインドで前半を終了する。

ハーフタイムでは再度DFのポジショニングについて確認、特に前日に確認した99番ALSAYYADに対する効果的なDFを再確認して、更に強く守る意識を高めた。

後半いきなり7番MERZA、50番ALMAQABIの連打で先行を許すが、GK岩下がノーマークをセーブした後半5分過ぎから徳田のミドルを皮切りに、部井久のカットインで得た7mTを徳田が決め、再び岩下のファインセーブから柴山のサイド、成田の速攻で得た7mTを徳田が再び落ち着いて決めるなど4連続得点で試合の流れをつかみ、後半12分に18－17と逆転に成功する。対するバーレーンも99番ALSAYYADを中心に反撃を試みるが、日本は後半16分に部井久がディスタンスを決めると、GK久保が相手7mTをファインセーブ、吉野のディスタンス、笠原の速攻で得た7mTを徳田が決める。勢いに乗った日本は、続けてGK岩下もファインセーブを連発。そのまま徳田のブレークスルーが決まり、再び4連続得点で試合の主導権を握り、後半22分には24－20と4点のリードを奪う。

堪らずバーレーンはタイムアウトを請求、直後に7番MERZAに強引に決められるも、クイックスタートから土井がサイドを決めて相手に流れを渡さない。その後退場などで相手に流れが行きかける所、吉野がパスカットから自ら速攻に持ち込みリードを守る。続く攻撃でも吉野がディスタンスを決めて27－24と3点差。最終盤でバーレーンに連続得点を許すものの、日本は残り14秒でのタイムアウトで残り時間の使い方、ゲームの終わらせ方について意思統一を図り、時間を上手く使いきり27－26でタイムアップ。現アジア王者のバーレーン相手に連続勝利を収めて銅メダルを獲得した。

この試合のMOMにはこの日7得点を決めた徳田が選出された。昨年1月の世界選手権時には出来なかった「惜敗からのメンタル面・フィジカル面での立て直し」を図り、更には今まで出場機会に恵まれなかった若手選手が躍動するなど、オリンピックやその先の世界選手権と日本球界の未来につながる試合を展開することが出来た。

なお、大会のオールスターチーム（ベスト7）にキャプテン・土井、大会ベストプレーヤー（MVP）には東江が選出された。

報告記入者　：　舎利弗　学